

中日国交断絶期における唯一の日本語・ 日本文学教授—徐祖正

経 志 江

はじめに

現在でこそ中国には日本語を学ぶ機関が多数あるが、ひとたび時間を建国当初まで遡ってみれば、日本語教育機関は唯一北京大学のみであった。いうまでもなく北京大学は現在でも日本語教育の質、量において最先端をはしている。その北京大学の大学院日本語専攻募集要項（北京大学2011日研招生简章）を開いてみると日本語学科を紹介する文章がある。そこに「文革以前の我が国唯一の日本語・日本文学教授」として讃えられる教師がいた。それが徐祖正その人である。

徐祖正は、字を耀辰と呼ぶ。江蘇省の昆山巴城（現在、昆山市巴城鎮）で生まれた。生年は1894年の説、1895年の説、1897年の説があり、定かではない¹⁾。1978年に病死した²⁾。

郁達夫、陶晶孫、李健吾など同時代の文人の回顧文には、たびたび徐の風貌が描かれた。背が低く端正な顔つき、ふるまいが上品で、温厚な性格を持つキリスト教信者であった³⁾。徐は1912（民国元）年、つまり中華民国が誕生してまもなく日本に留学し、東京同文書院などを経て東京高等師範学校（以下、東京高師）に進学した。帰国後、徐が周作人、張黄らとともに北京大学に創設したのが中国の大学における最初の日本語教育機関、北京大学「日文組」（即ち、日本語学科）である。また、北京女子高等師範学校の創設にも深く関わった⁴⁾。徐の文学活動も注目すべきものがある。郭沫若らと

文学団体を設立し、周作人、魯迅が主催する週刊誌『語絲』にも多くの原稿を寄せた。また、北新書局で島崎藤村⁵⁾『新生』の訳本と、単著『蘭生弟の日記』を出版した。

このように、徐は日本語教育や文学研究にはっきりとした足跡を残した。しかし残念なことは、日中国交回復まで23年間、徐は新中国唯一の日本語教育に携わる教授と認められながらも、徐の日本語教育に関する研究は未だ皆無である。また、文学史や人物史研究においても、徐の経歴に関する基本的な記述さえ間違いだらけという状況である⁶⁾。

徐への注目度の低さの背景には、徐の政治的な立場が問題視されたことがあると思われる。周知の通り、1920年代の中国文壇で共に活躍してきた郭沫若や魯迅らは後に左翼文学の陣営に加わり、新中国の正統派の代表として研究の的となった。また、近年の歴史学界では、外敵の侵略に対して武力によって抵抗した人々だけでなく、和平交渉の可能性も重視した人物への評価を見直すべきだという新たな歴史観が現れ⁷⁾、親日派として戦後に断罪された周作人⁸⁾も一気に脚光を浴びた。

ところで徐は、1927年以降に魯迅や郭沫若など左翼文学者と一定の距離を保った。一方、毛沢東が槍玉にあげた三人の作家の一人である周作人⁹⁾と緊密な交友関係を持ちながらも、日中戦争以降は周作人と違って「親日派」にならなかった。つまり、歴史人物を善と悪で二分する中国伝統的な歴史観からみれば、中間派、あるいは政治的な色彩が薄くいわば純学者である徐は扱にくいのである。

しかし、左派でない、あるいは親日派と標榜しなかったからといって、徐が日本語教育界や文学界、さらに近・現代中日交流に与えた影響が薄かったわけではない。徐の研究は、新中国における日本語教育がどのように行われたのかを明らかにするために必要不可欠な作業であり、近・現代中国文学史や中日教育交流史を解明するための重要な手がかりでもある。

そこで、本論文では、徐祖正の経歴、とりわけ日本留学の十年と帰国後の北京での教育的活動に焦点を当てその生涯を描く。

1. 日本留学の十年

(1) 留日前の経歴

徐は次男として生まれた。生まれてまもなく母親が病死したため、近辺の瀾漕村の農民の家に預けられた。地元の私塾で読み書きなど基礎教育を受けた後、1909年に上海にある出版社、商務印書館が新設した商業補習学校に入学した¹⁰⁾。

この学校は商務印書館が自社の人材養成のために設立したもので、中等レベルの教育機関であった。近代教育を取り入れたばかりの中国にとってまだまだ珍しいものであった。教員陣には張元濟、蔣維喬、陸費達、顧復生など清朝末期の上海を代表する知識人が勢揃いして人々の耳目を集めた。新聞に学生募集の公告を出し、「国文と算学によく通し、反応敏捷、態度活潑な者」を集めた。2年間の課程で、1年半の授業と半年の実習が課せられていた¹¹⁾。7月26日に開学し、授業は8—12科目であった。卒業生の多くは印書館の発行部門や事務部門に派遣されたが、徐のように印書館に就職しなかった者もいた¹²⁾。

1911年、徐は商業補習学校を終えて郷里に帰った。その折り起こった農民一揆に積極的に身を投じ、警察に追われる身となったが、兄徐祖廉の助力でからも脱出した。当時は辛亥革命の直前で、多くの青年が革命に参加するために武昌へ赴いた。郷里を逃れた徐も武昌を目指した。しかし、まだ幼く背があまりにも低かったため、革命軍に採用されることはなかった。結局、地方の兵士養成機関に入り¹³⁾、武昌学生軍の一員として武昌蜂起に参加した¹⁴⁾。1912年1月1日、中華民国臨時政府（南京）が誕生した。武昌学生軍は解散され¹⁵⁾、徐は軍から離れた。

一方、海外への留学生派遣が再開し、日本留学も再び奨励されるようになった。とりわけ徐の出身省である江蘇省は「日本留学生給費方法」を制定し、「官立各高等学校専門学校本科又は私立大学大学部本科入学者1人1ヶ月旅費共に40元」を支給するという日本留学奨励策を打ち出した¹⁶⁾。その金

額は、当時の国費の「日本、每人年額400元」より高く設定されていた¹⁷⁾。徐はこうした流れの中、日本に留学することを目指した。

(2) 東京同文書院への留学

1912年初頭、徐は中国駐日本公使館留学生監督を務める叔父徐夢鷹を頼り、東京同文書院に入学した¹⁸⁾。徐はここで4年間を過ごした。

東京同文書院に関する先行研究はほとんどないため、ここでは少し紙幅を費やして徐が在籍中の同書院の状況について紹介しよう。

東京同文書院(1899-1922年)は、東京の近衛篤磨公爵家屋敷地内に、東亜同文会が中国人留学生を受け入れるために設立した教育機関であった。院長は細川護成侯爵で、教師陣には1914年の時点で「教授が24人も…其中専門の学士も9人」いた¹⁹⁾。

教育内容は、日本語のほか、受験のための「普通学」を教えていた²⁰⁾。いわば中国人留学生の進学のための予備校である。

同敷地内には目白中学校(旧制)が併設されており²¹⁾、高等学校や高等師範学校など専門学校に進学したい中国人留学生のために学歴を補する役割を果たした。

1913年の東亜同文会「春季大会事業報告」の記録によると、「一昨秋革命乱の結果と致しまして、支那学生は其革命に投ずる為めに帰国致しまして、甚だ残り少くなりましたが、昨年の秋頃から段々再びやってきまして、殊に今年の1月から3月までの間に、130名程殖えました。3月に26名卒業いたしましたして、皆何れも専門学校に転じました。現在普通学生のみが170名」在籍していた。

つまり、徐が入学してまもなく、東京同文書院は多くの中国人留学生を受け入れた。また、卒業生には専門学校に進学した者が多いことが分かる。後に徐も同じ道を辿った。

(3) 東京高等師範学校への進学

1916年4月、徐は東京高等師範学校（以下、東京高師と略す）文科第三部英文学専攻に進学した²²⁾。当時の東京高師は中国と日本との間に結ばれた五校を官費とする特約校の1つで、合格すれば中国政府から官費を支給された²³⁾。1914年に五校の1つである第一高等学校に合格した郭沫若の回顧によると、この五校は特約によって留学生の競争的となり、合格するのは「非常な難関で」、「八、九年受けてもまだ受からないものもいた」という²⁴⁾。

学科目には修身、教育学、英語、心理学論理学及哲学、国語及漢文、歴史、言語学、体育、随意科目があった。具体的には、修身に実践倫理、国民道德論、倫理学、道德史、教育学、教育史、教授法、学校衛生、教育法令、英語に講読、文法、作文、口述、修辞学、文学史、心理学倫理学及哲学に論理学、心理学、哲学概論、国文及漢文に講読、文法、作文、歴史に西洋史、言語学、声音学、体育に体操、教練および競技、随意科目に独語があった。

『東京高等師範学校一覧』によると、1916年度文科第三部英文学専攻の教師陣には、岡倉由三郎、塩谷栄、石川林四郎、上条辰蔵の4名の教授と、武信由太郎、飯島東太郎、青木常雄と英国人2名の計5名の講師がいた。

徐が在籍した4年間の「学級主任」は、予科が飯島講師、第一学年が石川教授、第二学年が塩谷教授、第三学年が岡倉教授であった。次で述べるが、徐は直接指導に当たったと思われる4人の学級主任、とりわけ石川教授の影響を受けたと思われる。ここでは、この4人の学級主任について簡単に紹介しておく。

飯島は1914年に東京高師英語専攻科を卒業した後に東京高師の講師となった。1916年12月に『New English Grammar for Middle-Grade Schools』を著わし、1917年2月に「文部省検定済」の「中学校英語科」の教科書となった²⁵⁾。

石川は東京帝国大学英文科を経て、1904年に東京高師講師、1908年に六高教授、1910年に東京高師教授となった。

塩谷栄はE.F.Edgettと『不如帰』を英訳し、『Nami-ko』として1904年にア

アメリカとイギリスで同時に出版された²⁶⁾。1908年に東京高師講師、1909年に教授となった。

岡倉は東京帝国大学文科大学選科を経て、1896年から東京高師の教授となり、学科主任をも兼任した。岡倉天心の弟であった。

徐と同年度に入学した外国人学生は27名で²⁷⁾、平均すると一専攻あたり1名程度である²⁸⁾。当時、東京高師に学ぶ外国人学生の大半は中国人留学生が占めていた。東京高師時代の徐について、当時第一高等学校にいた陶晶孫は「氏は…身体が弱く私とは時々期せずして同じ葉山などに暑を避けたり、時には伊豆を廻ったり、漂泊の旅をしたりした」と回想した²⁹⁾。

1920年3月、徐は東京高等師範学校を卒業した。

(4) 京都での二年間

徐が入った文科第三部英文学専攻には、張黄（字、鳳挙）³⁰⁾という1つ上級の中国人留学生がいた。徐の人生にとって、この人物は大きな役割を果たした。

徐が3年生の1919年3月、張黄は東京高師を卒業して京都帝国大学文学科英文学専攻に進学して厨川白村に師事した。一年後の1920年3月、徐が卒業し、張黄と同じような道を選んだ。このことについて、張黄は「私が入ったあくる年から、徐祖正君、…などが相次いで来た」、「私が京都へ来た最大原因は、私の後を継いだ幾人かの友人達のそれと同じく、厨川白村先生の門牆に列したい心切ない念願にあった」と回想した³¹⁾。

張と徐の「厨川白村の門牆に列したい心切ない念願」は共通の学級主任である石川林四郎教授の影響があったと思われる。石川は徐の第一学年の学級主任であった。また、張黄の予科と第一学年の学級主任でもあった。一方、石川は白村の東京帝国大学での1つ先輩であった。確かな根拠はないが、石川は愛弟子を後輩、京都帝国大学の厨川に推薦したのではないかと考えられる。また、1919年度は厨川が助教授から教授に昇進した年であり、精力的に活躍しようとする時期でもあったからである³²⁾。

しかし、徐が京都帝国大学に進学しようとする1920年、折悪しく厨川が黴菌に冒され左足を切断することとなり³³⁾、結局、徐は京都大学に進学することができなかった³⁴⁾。後に徐を北京大学に紹介した周作人の回憶によると、「張徐二君は英文学出身で、厨川白村の学生であった」とあるので³⁵⁾、おそらく正規の学生ではなかったものの何らかの形で張黄と一緒に厨川の教えを受けていたのかもしれない。

徐は京都大学に入学できなかったが、1920年から1922年までの二年間、京都で過ごした。この間、徐は多くの詩を残した³⁶⁾。これらの詩は徐の初期段階の作品であり、その創作から文学の道を模索したと思われる。

徐が郭沫若らと文学雑誌を創刊したのもこの時期であった。1920年に徐は郭沫若、郁達夫、何畏、陶晶孫らと一緒に『Green』を編集した³⁷⁾。翌1921年に郭沫若、郁達夫、張資平、何畏らと共に創造社を結成し、『創造』の発刊を目指した。そのことについて郭は「資平と何畏に会えたのは、東大の友人たちが学校から彼らを探して来てくれたためだった。思いかけず徐祖正にもあった。彼は私が京都に行った時には、もう東京に来ていて、そのころ達夫と同じ下宿屋に住んでいたらしかった。その日の午後、達夫の部屋に集まって話し合った。みんなの意見も『創造』という名を使うのに賛成で、しばらく季刊を出し、将来能力が十分になってから別の形式をとろう、ということになった。…この会議があるいは創造社の正式の成立だといえるかも知れない、時は1921年7月初旬」と回顧した³⁸⁾。

郭の「思いかけず徐祖正にもあった」という言葉には、雑誌創刊に向けて大きな戦力となる徐に幸運にも出会えた喜びが表れている。それは徐が『Green』の編集などを通じて中国人留学生の間で、有望な作家として認められていたからである。文壇にながしかの地位を得ていた徐祖正が加わることは『創造』の創刊に大きな希望をもたらした。以降、徐と郭の交流が深まり、後1927年の南昌蜂起後に日本へ亡命した郭を徐が援助することになった³⁹⁾。また、郭は新中国成立後に徐を北京大学に推薦した⁴⁰⁾。

2. 帰国後の教育的活動

(1) 日本語教育に携わって

1922年、徐は東京高師からの先輩である張黄の紹介で北京高師の教鞭をとることになり、1923年まで1年間勤めた⁴¹⁾。ちなみに、張黄は1922年3月に京都帝国大学文学科英文学専攻で文学士を取得し、北京大学の教授となり、周作人の右腕として北京文壇で名を知られた人物である。教育界や文壇での人脈を生かして自分の後輩であり親友である徐を北京高師に紹介したと思われる。この一年間、徐が何の科目を担当していたのかについては不明であるが、1922年に発行された北京高師の学会誌『国文学会叢刊』第1巻第1期に掲載された「国文学会」の「会員録」には、徐の名前があり⁴²⁾、また徐の専門から考えると、文学関係の授業を担当していたのではないかと考えられる。

1922年9月5日、徐は張黄の案内で周氏兄弟（魯迅と周作人）の自宅を訪問した⁴³⁾。これ以降、徐と周氏兄弟との交流が頻繁となった。張黄が徐を周作人に紹介したのは、特別な意図があったと考えられる。張黄は1922年7月16日に『北京週報』で周作人と連名して「北京大学に新設する日本文学系に就いて」を発表した⁴⁴⁾。当時の北京文壇には、北京大学日本文学系の教授に相応しい人材は乏しく、徐こそ適材と考えて周作人に推薦したと思われる。

1923年、徐は周作人の推薦で北京大学の教授となり⁴⁵⁾、以後、周作人、張黄と共に日本文学系の創設に腐心した。

1924年、周作人、張黄、徐祖正三教授の努力によって、「日文組」と「梵文組」の二組を有する「東方文学系」が創設された。責任者は周作人であった⁴⁶⁾。

1925年、日文組は予科生を募集したが⁴⁷⁾、数名しか集まらなかったため、結局、1926年には募集が停止された⁴⁸⁾。さらに1927年、張作霖政権の成立および財政難に伴って北京大学が京師大学校に合併され、学生が集まらない東方文学系は廃止された。こうして東方文学系はわずか二年間で幕を閉じた。これにより1925年に入学した数名の学生は、1927年に予科を終えても、日文

組本科に進学できず、結局、同大学の経済学系など文科各系に吸収された。予科経営の二年間、徐が何を教えていたのかについては不明である⁴⁹⁾。

1929年、東方文学系日文組予科が再開された。当時、張黄はすでにフランスに留学しており、周作人と徐祖正が中心になって運営に当たったと思われる。1931年、北京大学は各外国文学系を合併して外国語文学系を設置し、英、仏、独、日の4組を設けた⁵⁰⁾。こうして、東方文学系日文組は外国語文学系日文組となった。

ここに北京大学は1931年から初めて日本語を専攻する本科生の教育に乗り出した。同年度の日文組のカリキュラムによると、徐は一年生の「講読甲（語体文）」と「散文」（すなわち、現代文学）を担当した。「講読甲（語体文）」では「島崎藤村傑作集（新潮社）」を教材として使用し、「散文」では「芭蕉著奥の細道（岩波文庫本）」を教材とした。また、1934年度のカリキュラムでは、徐は二年生の「万葉集講読」と「日文実習」、三年生の「古今集講読」を担当した⁵¹⁾。

この日文組は日中戦争が勃発した1937年まで続いた。この6年間、教師陣には、周作人教授、徐祖正教授、銭稻孫講師がおり⁵²⁾、月給は周作人が500円、徐祖正が400円、銭稻孫が100円であった⁵³⁾。ちなみに、当時の北京大学学長の月給は600円であった。卒業生はわずか7名であった。すなわち、1935年に卒業した王基、龔沢銑、魏敷訓の3名と、1936年に卒業した王錫禄と蘇瑞成の2名と、1937年に卒業した周豊一と汪鴻文の2名である。特筆すべきなのは、1935年に卒業した王基、龔沢銑、魏敷訓の3名が、1929年に東方文学系日文組予科に入学した予科生で⁵⁴⁾、中国最初の日本語専攻の本科卒業生でもあったことである。龔沢銑と魏敷訓は後に北京大学の日本語教師となったが、王基については不明である。また、1937年に卒業した周豊一は、周作人の息子であり、後に北京大学図書館に勤めた。

（2）北京文壇での活躍

（1）で述べたように帰国してまもなく、徐は北京文壇を代表する周氏兄弟

などと頻繁に交流を始めた。その様子は魯迅と周作人の日記から読み取れる。1923年前半の日記を調べたところ、徐は少なくとも8回周氏兄弟と会い、たびたび食事を共にした。同席者には張黄、北京大学教授の沈氏三兄弟（士遠、尹黙、堅士）⁵⁵⁾、留日時代の親友である郁達夫などがいた。周氏兄弟の日記から、北京における徐の交友活動の一端をうかがえると同時に、帰国したばかりの徐が順調に北京文壇での地位を確立しつつあり、その才能は周氏兄弟らに認められていたことが見て取れる。

日本留学経験を持つ徐は、明治日本の文壇に強い影響を与えたロマン主義文学と自然主義文学に注目していた。日口戦争後の日本にならって、自意識の覚醒による近代国民の形成を高唱した。「文芸と思想には個人しかない。政治社会の束縛を逃れ、個人の主観的な尊厳を維持するため、文芸思想の畑があるのだ。そこでは模倣は許されず、服従する必要もない。個人の尊厳を唱えることは団体国家を無視するものではない。団体国家は健全な判断、鋭い思索、豊かな情感を持つ個体の上に成り立っている。この個体を養成することができるのはただ文芸しかない」と論じた⁵⁶⁾。人性解放にはじまり、自我至上、自我拡大の欲求は、辛亥革命後に残存していた封建思想に対する反発の声に他ならなかった。文学を通じて国民の覚醒を促そうとする主張は、魯迅や郭沫若など左翼文学者との共通点である。

徐の論文からかれの思想に踏み込んでみよう。ロマン主義文学について、イギリスロマン主義の筆頭であるジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, sixth Baron, 1788-1824年)、パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822年)、ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821年)、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827年)、自然主義文学について、フランスを代表する自然主義文学者であるアンリ・ルネ・アルベール・ギ・ド・モーパッサン (Henri René Albert Guy de Maupassant, 1850-1893年) を取り上げた。附表「徐祖正の主な著作一覧」中の「2. 論文」の「1」、「10」、「31」、「34-36」と、「25-26」、「29」がそれである。

とりわけ、徐はバイロンの精神は「革命的な精神」であると高く評価し、

「擬古主義に反抗し、無味乾燥の文学に命の情熱を注いだ」と述べた。具体的には実社会や自我の生活を凝視し、時代の現実には抑圧された個人主義的自我を、芸術と観念のうちに絶対的に解放することを目指した。

初めの論文では、キーツがギリシャ神話を題材に書いた早期の短詩「李恩潭與葉愛羅」(「Leander と Hero」)を取り上げ、キーツの「If I hid myself, it sure shall be In the very fane, the light of Poesy ; If I do fall, at least I will be laid Beneath the silence of a poplar shade」という言葉を引用しており、その文学への献身的な精神に感銘を受けたことが窺える。また、一個人としてのキーツを尊敬した。詩中の主人公である Leander は Hero への献身的な愛を貫いて最後には悲劇的な死を遂げる。一方詩人キーツは、その私生活において恋人 miss Fanny Brawne への愛に執着した。しかし、その愛に敗れ絶望したキーツは自らの命を絶った。詩の世界における至上的愛と詩人の愛を貫いた人生を重ねて、徐は、愛のためにすべてを捧げる生き方に共鳴した。

こうした恋愛神聖の主張は、徐が1926年に世に出した最初の単著『蘭生弟的日記』にも色濃く反映された。『蘭生弟的日記』は主人公「蘭生」と従兄弟の姉「薰南」との間に発生した恋愛ストーリーである。写実的な手法を用いて、徐自らの人生を「蘭生」に投影し、苦悩と哀切に満ちた情的生活を赤裸々に熱っぽく描写した。その特徴は島崎藤村の作品と通底しており、島崎の長篇小説である『新生』を中国語に訳し、島崎を中国に紹介したことも頷ける⁵⁷⁾。また、日本の自然主義文学に注目し、日本人の自然表現を「日本人の俳諧精神—芭蕉—茶之流」に求めた⁵⁸⁾。前述したように徐は島崎と芭蕉の作品を北京大学日文組の教材として使ったが、その理由はここにあった。

日中戦争が勃発する前、徐は夏休みを利用して度々日本を訪れた。1934年夏の訪日中に周作人と合流し、日華学会、東亜高等予備学校、外務省、東方文化研究所などを訪問し、また、朝日新聞や読売新聞のインタビューにも応じた⁵⁹⁾。この訪日について、『日華学報』は「周徐劉王諸氏歓迎記念撮影」を掲載し、「周作人徐祖正両氏来遊」を紹介した⁶⁰⁾。

日本側は周作人と徐祖正の来訪に研究会を開いた。そのことについて、主

催者である竹内好は、日記で次のように記した⁶¹⁾。

7月19日、「徐祖正（北京大学教授、作家、日本文学研究家）の歓迎会への協力を頼まれ、尽力を約すのち研究会の主催となる」。「二人は1935年から北京大学外国語文学系で日本文学を開講するための諸準備と書籍購入のため来日していた」。

8月4日、「日比谷の山水楼で周作人徐祖正歓迎会開催。前月来、歓迎会準備に奔走し、発起人に新居格のほか有島生馬、佐藤春夫、竹田復、与謝野寛を依頼」。「出席者25名の中には、塩谷温、島崎藤村、戸川秋骨、村松梢風、堀口大学の顔もあった」。

このように日本で当時の文壇を代表する文学者、作家たちと交流したことから、徐は周作人と共に中国の文壇の代表として日本の文壇に注目されていたことが理解できる。

この歓迎会の時に島崎藤村は徐を食事に誘っており、20日の晩、麻布区六本木の大和田にて徐と周作人を招待した⁶²⁾。島崎藤村に招待されたのは、徐が島崎藤村『新生』を翻訳する際、しばしば島崎藤村と通信し、一度訪問したこともあったからである⁶³⁾。徐は『新生』が島崎藤村の円熟期の作品であると認識しており、4年の歳月を費やして翻訳した⁶⁴⁾。出版前から中国人読者からの問い合わせがあったほどの待望作であった⁶⁵⁾。

（3）日中戦争勃発以降

1937年、日中戦争が勃発した。北京にあった国立大学は南へ移り、それに伴いほとんどの教師が南下した。徐も南下するつもりはあったが、結局離れなかった。まもなく日本の傀儡政権下の偽北平師範大学長に就任したものの日本による統制に耐えきれず、わずか18日で辞めた。その後は、書齋に閉じこもる生活を送った⁶⁶⁾。

1939年秋、偽北京大学には文学院が設立された。院長は周作人であった。徐は周の招きで英文系主任となった⁶⁷⁾。また、日中戦争中に北京で創立された日中合弁会社・新民印書館の外郭団体であった中国文化振興会の委員とな

り、周作人らと共に同会の機関誌『芸文』の編集・刊行に努めた⁶⁸⁾。

日本が敗戦した後の1946年、周作人は「漢奸」として国民政府に逮捕され、裁判にかけられた。「北平臨時大学補習班教授徐祖正ら文化人五四人」は連名で文章を最高裁に提出し、周作人の無罪を主張した⁶⁹⁾。その後、徐は中国共産党系列の張家口外語学院で教鞭をとった⁷⁰⁾。

ちなみに、日中戦争によって中断された北京大学日本語専攻が再開されたのは1946年であった。文学院東方語文学系満蒙蔵文組に従属したかたちで、四年本科であった。1946年から新中国建国の1949年まで、この日本語専攻でどのくらいの学生が学んだのかは不明である⁷¹⁾。

1949年に中華人民共和国が誕生した。徐は郭沫若の推薦で再び北京大学に戻り、日本語専攻の教授となった⁷²⁾。1957年、毛沢東が反体制狩りのために反右派闘争を発動した。晩年の徐は北京大学で「右派」とされた。1966年、文化大革命が始まった。徐は辛亥革命に参加したことなどで再度批判され、トイレ清掃など労働改造に送り込まれた。不正常的な時代を生き抜こうとした徐の顔には、微笑みはめったにみられなくなったと同僚の金克木が言う⁷³⁾。

文化大革命が終わった2年後の1978年5月、徐は名誉回復を待たずに癌でなくなった。徐の死に対し、北京大学は追悼会を開き、季羨林北京大学副学長は「徐先生は生涯、共産党に反対したことはなく、毛主席周総理を極めて擁護していた。それだけではなく辛亥革命時に孫中山先生に追随した」と語り、徐の名誉を回復した⁷⁴⁾。

おわりに—徐祖正研究の意義

本論文では、徐の経歴をできるだけ明らかにした。こうした徐の経歴の解明は、北京大学校史の研究にはもちろん、中国文学史、日本語教育史、さらに中国近・現代史の研究にも欠かせない作業である。しかし残念なことは、史料の制限で、徐の新中国成立後の北京大学日本語専攻における担当科目や使った教材など日本語教育の実態に踏み入ることができなかった。引き続き

史料の発掘と卒業生へのインタビューを通して解明する必要がある。

徐は魯迅、周作人、郭沫若、張黄、郁達夫らと同じ官費日本留学生で、いわば20世紀初頭の中国のエリートであった。日口戦争以降の日本の飛躍的な発展を目にした彼らエリートは、中国と同じように従来の反封建的因襲や道徳に縛られた日本がどのように西洋文化を消化し、移り変わっていくのかに強い興味を示した。日本の文壇に影響を及ぼしたロマン主義文学や自然主義文学に傾倒したのは、その証左である。

やがて近・現代中国の文壇や社会の主流となるプロレタリア思想の大波は、徐が芽生えさせた個の思想を呑み込み押し流した。徐は文学を経世の一手段とする左翼文学者の功利主義と距離を保つようになった。そうした徐の姿勢に対し、1930年代の受講生の1人であった呉組細は、学術のために学術する「守旧的文学理論家である」と批判した⁷⁵⁾。徐はもはや時代遅れであると世に捨てられた。

徐が生きた時代において捨てられたその思想は、真の個の形成が望まれる今日の中国において鋭い光を放っている。功利主義が横行している現在の中国において、こうした徐の思想はもう一度吟味される意味がある。徐の思想に関する本格的な研究は、次の課題としたい。

追記：徐祖正研究に当たっては、北京大学の孫宗光先生に多大なご指導を頂いた。この場を借りて感謝したい。

注

- 1) 「1894年説」の代表的なものは、「学校出身姓名表」（朱保熙編撰『巴溪誌』、1935年版）である。その他、昆山市人民政府ホームページに掲載された鄭涌泉「巴城三徐」（2007年3月28日発表）董馥榮「徐祖正駱駝書屋所蔵『閩閩叢珍』」（『文献』第2期、2007年4月、127-133頁）がある。「1895年説」の代表的なものは、徐祖正の甥にあたる李忠霖の遺稿「徐祖正教授逸聞數則」（中国人民政治協商會議江蘇省昆山市委員会文史征集委員会編『昆山文史』第九輯、内部資料、1990年12月、10-14頁）である。その他、『魯迅全集』第19巻『日記Ⅲ・日記注釈索引』（1989年第三刷、537

- 頁)、北京大学の卒業生である陳応年の回顧文「深切懐念徐祖正教授」(2006年11月24日ネット上発表)がある。「1897年説」の代表的なものは、『日本留学支那人録』(興亜院政務部、1942年3月、95頁)である。その他、李立明『中国現代六百作家小傳』(波文書局、1977年10月、291-292頁)がある。また、陶晶孫『藤村雑記—『文学界』のこととその紹介者徐祖正氏のこと—』(『日本への遺書』創元社、昭和28年3月3版、184-186頁)には、徐は「私よりも若い(註)」と述べたが、註に「うっかり若いと思ったのは誤りで近頃氏から君より先輩だぞと云ってよこされた」との補足があった。陶は1897年12月18日生まれなので、徐がそれ以前に生まれたことになる。
- 2) 前出、李忠霖遺稿「徐祖正教授逸聞数則」、14頁。
 - 3) 李健吾「穹枝梅花和瘋子」、張大明編『李健吾創作評論選集』人民文学出版社、1984年8月、248頁。
 - 4) 新中国時代の徐祖正の同僚で、北京大学日本語学科長を務めた孫宗光教授からいただいたメール(2011, 7, 10)によると、徐自身が北京女子高等師範学校の創設に深く関与したことに誇りを持っていた。
 - 5) 吉田精一『近代日本文学概説(改訂版)』秀英出版、1985年4月改訂12版、51-52頁。
 - 6) 銭理群・温儒敏・呉福輝『中国現代文学三十年(修訂本)』(北京大学出版社、1998年、17頁)には、創造社成立時のメンバーとして「徐祖正」の名を連ねるだけである。王琢ら編『中日比較文学研究資料彙編』(中国美術学院出版社、2002年3月、170頁)には、徐祖正が「東京帝国大学で学んだ」と誤記した。こうした誤記は、武継平『郭沫若留日十年(1914-1924)』(重慶出版社、2001年3月、112頁)にもあった。また、前出した丘維俊「文壇勇士徐祖正」には「徐祖正は…同文書院にて日本語を補習した。まもなく第三高等学堂に入学した。…卒業後に京都帝国大学外文学部に進学し、欧米西洋文学を学んだ。…同窓には郁達夫、張鳳挙などがいた」と書かれた。「第三高等学堂」は旧制の第三高等学校のことを指すと思う。『第三高等学校一覽』を調べたところ、徐祖正、郁達夫、張鳳挙の名前はいずれもなかった。ちなみに、郁達夫の本名は郁文で、第一高等学校を卒業した後、東京帝国大学に進学した。
 - 7) 劉傑「日中戦争下の『親日派』—『漢奸裁判』試論・その二—」『早稲田人文自然科学研究』第55号、1999年3月、79頁。
 - 8) 周作人は、1939年から日本の傀儡政権である汪兆銘(精衛)政府の教育部門に協力したことで、1946年に中国国民党政府によって「漢奸」として裁かれ、南京で投獄された。1949年に中華人民共和国の誕生によって釈放され、北京で執筆活動を行ったが、文化大革命期に実権派(走資派、反毛沢東派)にかくまわれたことで非難を受け、1967年に失意のうちに病没した。
 - 9) 「文学・芸術が帝国主義者のためのものであれば、周作人、張資平らがそうだが、それは民族裏切り者の文学・芸術とよばれる」、毛沢東「在延安文学芸術座談会上的讲话・結論(延安の文学・芸術座談会における講話・結論)、1942年5月23日」『毛沢東選集』第3巻、人民出版社、1991年所収。
 - 10) 前出、李忠霖遺稿「徐祖正教授逸聞数則」、10頁。

- 11) 一回生である黄警頌が書いた「二十年社交経験談—交際家黄警頌自述」（程徳培ら3人編『1926-1945 良友人物』上海社会科学院出版社、2004年1月所収）による。また、商務印書館の「百年大事記」（ホームページ <http://www.cp.com.cn/>）によると、商務印書館は1909年に商業補習学校を創設、初代校長は張元済であった。
- 12) 汪家熔『商務印書館史及其他—汪家熔出版史研究文集』中国書籍出版社、1998年10月第1版、122頁。
- 13) 前出、李忠霖遺稿「徐祖正教授逸聞数則」、10-11頁。
- 14) 金克木「徐祖正教授の難得一笑」（光明網 www.gmw.cn）によると、徐の実家は徐が退役時の証書を保管している。
- 15) 「武昌学生軍の解散」、「時事」、『支那』第3巻第8号、1912年4月20日、34頁。
- 16) 「江蘇省の日本留学生給費方法」、「時報」、『支那』第4巻第10号、1913年5月15日、61頁。
- 17) 「海外留学生学資」、「時報」、『支那』第4巻第17号、1913年9月1日、64頁。
- 18) 前出、李忠霖遺稿「徐祖正教授逸聞数則」、10-11頁。
- 19) 「東亜同文会秋季大会議事速記録」、「会報」、『支那』第5巻第2号、1914年1月15日、76頁。
- 20) 『支那』第4巻第11号、1913年6月1日、64頁。
- 21) 「歴史と沿革」、中央大学附属中学校・高等学校ホームページ参照。
- 22) 「外国学生」『東京高等師範学校一覧』1916年度参照。
- 23) 「江蘇省の日本留学生給費方法」『支那』第4巻第10号、1913年5月15日、61頁。
- 24) 小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝2 黒猫・創造十年他』平凡社、1968年、100頁。
- 25) 小山清『広島大学附属中学校・高等学校 新・教師列伝（下）』2008年発行（非売品）参照。
- 26) イギリス文壇は、当時の世界文学の中心ともいえる存在だが、そのなかで最も権威がある「The Times Literary Supplement」（タイムズ文芸附録）に『Nami-ko』の書評が載っていた（1904年6月24日）。
- 27) 『東京高等師範学校一覧』1915年度と1916年度の「外国学生」名簿を対照して数えれば、1916年度の入学者数が分かる。
- 28) 「東京高等師範学校概覧（1916年6月1日）」（『東京高等師範学校一覧』1916年度）によると、東京高師は1915年に改編し、修業年限は予科一年を含んだ四年であった。文科、理科、体育科の3科を設けており、文・理科にはそれぞれ3部があって、各部にはいくつかの専攻があった。
- 29) 前出、「藤村雑記—『文学界』のこととその紹介者徐祖正氏のこと—」、185-186頁。
- 30) 張黄、字を鳳挙、また定璜ともいう。1895年生まれ。江西省南昌の人。1922年帰国後、国立北京大学教授となり、翌1923年に中日学会を組織して両国の文化提携に尽力し、多大な功績を残した。後に国立北京女子師範大学講師、中法大学国文教授を歴任。『語絲』、『猛進』の投稿者。1925年12月から翌年4月にかけて、魯迅と輪番で『国民新報副刊』乙刊を編集。三・一八事件後、北洋軍閥政府から逮捕状が出される。1928年6月に国民党北伐軍の北京入城に際して国民党に入り、1930年初めにフランスに

- 渡る。第二次大戦後の日本に戦勝国中国の代表として駐在した（『日本留学支那要人録』（興亜院政務部、1942年3月、128頁）、「人物注訳・索引」（『魯迅全集』19、521頁）。ただ、この注訳には「東京帝国大学文学士」や「1921年帰国」との誤記がある）、周作人『知堂回想録』（『周作人文選』自伝、群衆出版社、1999年、384頁、382頁参照）。
- 31) 張鳳挙「わが師わが友」『京都大学文学部五十年史』、1956年11月、512-515頁。
 - 32) 『京都帝国大学一覽』参照。
 - 33) 厨川蝶子「悲しき追懐」、厨川蝶子・厨川白村集刊行会『厨川白村集』第2巻、1925年参照。
 - 34) 『京都帝国大学一覽』の新入生名簿と卒業生名簿には徐祖正の名前はなかった。
 - 35) 周作人『知堂回想録』群衆出版社、1999年、414頁。
 - 36) 徐祖正「Oshibana」『創造季刊』第4号、1927年8月10日、137-141頁。
 - 37) 王訓昭ら編『郭沫若研究資料』上冊、中国社会科学出版社、1981年1月、21頁。
 - 38) 前出、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝2 黒猫・創造十年他』、195頁。
 - 39) 沈夫強整理「曾是文壇一勇士 記徐祖正與周氏兄弟、郭沫若等友好往来」、前出、中国人民政治協商会議江蘇省昆山市委員会文史征集委員会編『昆山文史』、19頁。
 - 40) 1953年に入学した陳応年の回想による。
 - 41) 前出、李忠霖遺稿「徐祖正教授逸聞數則」、11頁。一方、徐が北京高師に赴任した期日について、北京師範大学校史には記録がない。前に紹介した徐の京都時代に書いた詩の日付から分析すると、徐は7月から8月までの間に帰国したことが分かる。おそらく9月の新年度に赴任したのではないかと思われる。
 - 42) 『北京師範大学校史 1902-1982』北京師範大学出版社、1982年6月、60-61頁。
 - 43) 『周作人の日記（影印本）』（中冊、大象出版社、1996年12月、255頁）によると、徐が最初に周宅を訪れたのは1922年9月5日午後で、張黄と共であった。
 - 44) 周作人・張黄「北京大学に新設する日本文学系に就いて」『北京週報』第25号、1922年7月16日。
 - 45) 『魯迅全集 19 日記Ⅲ・日記注訳索引』学習研究社、1986年8月、537頁。
 - 46) 『北京大学校史（1898-1949）』（増訂本）北京大学出版社、1988年4月、190頁。
 - 47) 前出、周作人・張黄「北京大学に新設する日本文学系に就いて」参照。
 - 48) 予科生には杜逢辰と蔡儀がいた。予科の学生募集が停止されたのは、1926年5月19日であった。杜逢辰のことや募集停止のことについて、王昇遠「周作人與北京大学日本文学学科之建立」（『魯迅研究月刊』2010年第7期、63頁）、蔡儀のことについては馮至「兩段回憶」（『副刊』1992年8月7日）参照。
 - 49) この時期、徐は周作人と一緒に北京女子師範大学に招聘され、英文学教授も兼任した。（「復校後各学科主任教員聘定情況」、薛綏之主編『魯迅生平史料彙編』第三輯、天津人民出版社、1983年4月、336頁）。また、徐の学生で、後に同僚でもあった孫宗光氏は「北京女子師範大学の設置に関しては林語堂氏と協力し実現したと言ってました」と筆者に語った。
 - 50) 前出、『北京大学校史（1898-1949）』、316頁。

- 51) 前出、『北京大学校史（1898-1949）』（316頁）および王昇遠「周作人與北京大学日本文学学科之建立」（63-64頁）参照。
- 52) 金克木「末班車」、陳平原等編『北大旧事』1998年1月、278頁。
- 53) 「1934-1935年度北大教授實際月薪2」、陳明遠『那時的大学』山西人民出版社、2011年8月。
- 54) 前出、王昇遠「周作人與北京大学日本文学学科之建立」、67頁。
- 55) 沈氏三兄弟、浙江省吳興県の人。士遠は上で、次は尹黙（原名は実、字を尹黙、号を君黙）、堅士（馭士とも書く）である。
- 56) 祖正「対話與独語」、『駱駝草』週刊第2期、1930年5月19日、1-2頁、前出伊藤虎丸編『駱駝草附駱駝』所収。
- 57) 島崎藤村著、徐祖正訳『新生』上・下、北新書局、1927年12月。
- 58) 徐祖正「日本人的俳諧精神」、陶亢徳編『日本管窺』宇宙風社、1936年12月、32-39頁。
- 59) 前出、張菊香・張鉄栄編著『周作人年譜（1885-1967）』、449頁。
- 60) 『日華学報』第47号、1934年9月15日参照。
- 61) 「年譜」『竹内好全集』第17巻、筑摩書房、1982年9月。
- 62) 周作人著・松枝茂夫訳「島崎藤村先生」、『島崎藤村全集別巻』筑摩書房、1983年1月、207頁。
- 63) 前出、周作人著・松枝茂夫訳「島崎藤村先生」、『島崎藤村全集別巻』、207頁。
- 64) 「附表 徐祖正著作一覽」の「論文・訳文など」の「8」と「22」を参照。
- 65) 徐祖正「消息」『語絲』第140期、1927年7月16日、20頁。
- 66) 李健吾「穹枝梅花和瘋子」（張大明編『李健吾創作評論選集』人民文学出版社、1984年8月、248頁）と、嘉「老人的胡鬧」（文天行・王大明・廖全京編『中華全国文芸界抗敵協會資料彙編』四川省社会科学院出版社、1983年12月第1版、271頁）参照。
- 67) 黄開發整理「沈啓無自述（代年表）」、北京魯迅博物館編『苦雨齋文叢：沈啓無卷』遼寧人民出版社、2009年1月参照。また、孫宗光は筆者に「1年間イギリスに留学していましたが多分日本から帰国してからのことと思います」、「日本文学に深い造詣を持っておられました、専攻は英文学で彼の図書の半分は英文学の原書でした」と徐について語った。
- 68) 黄漢青「新民印書館について」、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』第41号、2009年、146頁。
- 69) 「徐祖正等為保周作人致首都高等法院呈（1946.6.22）」、南京市檔案館編『審訊汪偽漢奸筆録 下』、江蘇古籍出版社、1992年7月、1436-1439頁。
- 70) 前出、李忠霖の遺稿「徐祖正教授逸聞數則」、14頁。
- 71) 前出、『北京大学校史（1898-1949）』、407頁、465頁、459頁。
- 72) 元北京大学日本語学科長・教授、孫宗光氏の証言によると、徐は1952年に北京大学に戻り、1953年に孫を助手として日本語学科に紹介した。
- 73) 前出、金克木「徐祖正教授の難得一笑」。
- 74) 前出、方紀生「駱駝草合訂本序」、19頁。
- 75) 「斥徐祖正先生」、吳組細『苑外集 文芸論評卷』北京大学出版社、1988年8月、11頁。

表 徐祖正の主な著作一覧

No	単・共	著書等の名称（日本語訳）	発行所、発表雑誌等の名称	発行又は発表の年月等
1. 著書・訳書				
1	単著	『蘭生弟の日記』（蘭生弟の日記）	北新書局	1926年7月
2	単訳	島崎藤村『新生』上・下	北新書局	1927年12月
3	共訳	武者小路実篤『四人及其他』	南京書店	1931年8月
2. 論文・訳文など				
1	単著	「李恩潭與葉愛羅」（Leander と Hero）	『語絲』第27期	1925年5月18日、 1-4頁
2	単訳	Augeuste Rodin 遺稿 「留給青年藝術家們的幾句話」 （若手藝術家たちに残すメッセージ）	『語絲』第43期	1925年9月7日、 1-3頁
3	単著	「生日の礼物（一幕劇）贈給語絲」 （誕生日の贈り物（一幕劇）語絲へ）	『語絲』第54期	1925年11月23日、 6-14頁
4	単著	「訳詩一首」	『語絲』第70期	1926年3月15日、 1-5頁
5	単著	「兩首小詩」	『語絲』第71期	1926年3月22日、 1-2頁
6	単著	「笑與哭」	『語絲』第74期	1926年4月20日、 5頁
7	単著	「哀悼與憶念」	『語絲』第75期	1926年4月19日、 4-6頁
8	単著	「新生的訳稿與底本」 （新生の訳稿と原本）	『語絲』第76期	1926年4月26日、 2-3頁
9	単著	「山中雜記 一」	『語絲』第81期	1926年5月31日、 1-3頁
10	単著	「拜輪的精神」（バイロンの精神）	『創造月刊』 第1巻第4期	1926年6月1日、 73-94頁
11	単著	「山中雜記 二」	『語絲』第84期	1926年6月21日、 6-10頁
12	単著	「蘭生弟の日記」	『駱駝』	1926年7月、 39-118頁
13	単著	「沙漠之夢」	『駱駝』	1926年7月、 144頁

No	単・共	著書等の名称（日本語訳）	発行所、発表雑誌等の名称	発行又は発表の年月等
14	単著	「山中雜記 三」	『語絲』第95期	1926年9月6日、 1-3頁
15	単著	「山中雜記 四・五」	『語絲』第97期	1926年9月20日、 1-7頁
16	単著	「山中雜記 六」	『語絲』第99期	1926年10月4日、 3-7頁
17	単著	「送南行的愛而君」（南行の愛而君へ）	『語絲』第101期	1926年10月18日、 1-11頁
18	単著	「進献之詞」	『語絲』第102期	1926年10月25日、 11-12頁
19	単著	「山中雜記 七」	『語絲』第103期	1926年11月1日、 3-9頁
20	単著	「山中雜記 八」	『語絲』第104期	1926年11月8日、 4-5頁
21	単著	「山中雜記 九」	『語絲』第105期	1926年11月15日、 3-7頁
22	単著	「山中雜記 十」	『語絲』第106期	1926年11月22日、 11-13頁
23	単著	「創造社訪問記と後記」	『洪水周年増刊』	1926年12月1日、 頁数不明
24	単著	「教育界の羞恥」	『語絲』第109期	1926年12月13日、 1頁
25	単著	「駱駝草－莫泊桑の母親」 （Maupassantの母親）	『語絲』第120期	1927年2月26日、 1-2頁
26	単著	「駱駝草－莫泊桑の修養時代」 （駱駝草－Maupassantの教養時代）	『語絲』第121期	1927年3月5日、 1-3頁
27	単著	「感想－生活的昇華與芸術的還元－上」 （感想－生活の昇華と芸術の還元－上）	『語絲』第139期	1927年7月9日、 3-7頁
28	単著	「感想－生活的昇華與芸術的還元－中、 下」	『語絲』第140期	1927年7月16日、 1-7頁
29	単著	「駱駝草－莫泊桑の作風與態度」 （莫泊桑：Maupassant）	『語絲』第141期	1927年7月23日、 1-3頁
30	単著	「Oshidznz」	『創造季刊』第4号	1927年8月10日、 137-141頁

No	単・共	著書等の名称（日本語訳）	発行所、発表雑誌等の名称	発行又は発表の年月等
31	単著	「英国浪漫派三詩人拜輪、雪菜、箕茨」 （英国ロマン派の三詩人—バイロン・シェリー・キーツ）	『創造季刊』第4号	1927年8月10日、 137-141頁
32	単著	「芥川龍之介の死」	『語絲』第144期	1927年8月13日、 1-4頁
33	単著	「教育漫語」	『語絲』第144期	1927年8月13日、 13-16頁
34	単著	「駱駝草—紀念英国神秘詩人白雷克 （william Blake）—上」	『語絲』第148期	1927年9月10日、 1-3頁
35	単著	「駱駝草—紀念英国神秘詩人白雷克 （william Blake）—中」	『語絲』第150期	1927年9月24日、 3-4頁
36	単著	「駱駝草—紀念英国神秘詩人白雷克 （william Blake）—下」	『語絲』第153期	1927年10月15日、 1-11頁
37	単著	「対話與独語」	『駱駝草』週刊第2期	1930年5月19日、 1-2頁
38	単著	「文学上の主張與理論」 （文学上の主張と理論）	『駱駝草』週刊第3期	1930年5月26日、 1-2頁
39	単著	「文学運動與政治的相關性」 （文学運動と政治の関連性について）	『駱駝草』週刊第4期	1930年6月2日、 1-2頁
40	単著	「文芸論戦」	『駱駝草』週刊第10期	1930年7月14日、 1-3頁
41	単著	「某天的日記」	『駱駝草』週刊第12期	1930年9月29日、 6-7頁
42	単著	「一個作家的基本理論—文学上の第三國際—」 （一作家の基本理論—文学上の第三國際—）	『駱駝草』週刊第20期	1930年10月6日、 1-3頁
43	単著	「理性化与文学運動 上」	『駱駝草』週刊第21期？	1930年10月13日、 4-5頁
44	単著	「理性化与文学運動 中」	『駱駝草』週刊第24期？	1930年10月20日、 4-5頁
45	単著	「理性化与文学運動 下」	『駱駝草』週刊第25期	1930年10月27日、 4-5頁
46	単著	「文化学院參觀記」	『孔徳校刊』第48期	1934年12月、 頁数不明

No	単・共	著書等の名称（日本語訳）	発行所、発表雑誌等の名称	発行又は発表の年月等
47	単著	「日本文学観の一断片」	『同仁』第8巻第11号	1934年11月、 頁数不明
48	単著	「日本人的俳諧精神」	陶亢徳編『日本管窺』 （宇宙風社）	1936年12月、 32-39頁
49	単著	島崎藤村著「岡倉覚三」	『北京近代科学図書館 館刊』第3号	1938年3月、 90-91頁
50	単著	「読『忸餘集』—郁達夫追憶之二」	『文藝時代』 第1巻第4期	1946年（9月）、 12-23頁
51	単著	「文芸復興期思想之特徴」 （文芸復興期における思想の特徴）	『文藝と生活』第2期	1946年（12月）、 12-23頁
52	単著	「回憶的 石評梅女士」 （石評梅女史への思い出）	『平定史志通訊』 第3期	1986年（9月）、 71-76頁

註：（ ）内は題目についての筆者の訳文である。